

教育活動の軌跡 年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず 完全合宿にこだわった労働者教育

金属労協組織総務局主査 上口 智子

はじめに 10年を振り返って

金属労協結成間もない1967年7月に大学と労働組合が提携する労働者教育・労働リーダーシップコースが始まって、半世紀以上が経過した。今や、金属労協の中でも最も歴史のある活動となっている。東日本では明治学院大学と、西日本では同志社大学と協力関係を結びながら、労働組合役員教育を推進してきた。

2008年からは東西を統一し、今年2024年10月には第55回労働リーダーシップコースを開催する。この間、新型コロナウイルス感染症に翻弄され、1年間開催を断念することもあり、翌年には再開するなど着実に歴史を重ねてきた。「年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず」。その時に咲く花はだいたい似た花が咲

いている、しかしそこに集う、出会う人はかならずしも同じではないという意味。初代校長の竹中正夫先生が開校式の式辞でおっしゃっていた言葉である。

開催にあたっての準備は毎年同じように行う。しかし、受講生は一人ひとり異なる。事務局として常にそのことは肝に銘じて、その時の受講生、その時の様々な情勢や環境等に対応し、運営を行ってきた。本稿では労働リーダーシップコースの開設から現在に至るまでの経緯と過去10年間の労働リーダーシップコースのトピックスについて報告する。

まずは東日本で開設

○開設の経緯

金属労協は1964年の結成当初から、現在を正しく見つめ、将来を予見し、組合員を正しく導いていくた

めには、将来の経験プラス新しい情勢に対応する力を持つ「リーダー」が必要であり、そのための本格的な労働者教育が必要であると痛感していた。

1967年2月、労働者教育対策委員会を立ち上げ、労働者教育のあり方について研究、検討を重ねた。時を同じくして労働者教育に関心を持っていた明治学院大学の金井信一郎教授と金属労協瀬戸一郎事務局長の出会いを通じて、同年7月に第1回労働リーダーシップコースが開講した。余談であるが、労働リーダーシップコース開講は「我が国における最初の大学と労働組合との組織的提携による労働教育講座」として好意的に報道された。

○目的

コースの目的は、金属労協と明治学院大学産業経済研究所で取り交わ

された覚書に「以て産業社会の発展に寄与するために、わが国における基幹産業たる金属産業に働く中堅的労働組合員に対して、大学水準の基礎的教育を行うものとする」と記されている。当時のカリキュラムを見ると、経済学、社会学、賃金論などの



第1回東日本労働リーダーシップコース(1967年7月・明治学院大学)

第1回 西日本労働リーダーシップコース特別講演
(1969年12月・関西セミナーハウス)



基礎講座だけでなく、ゼミナールでの徹底討論を盛り込むなど「大学水準の基礎的教育」をめざす内容となっており、現在のコースにも受け継がれている。

続いて西日本でも開校

○完全合宿制

2年後の1969年初夏、金井教授が同行して同志社大学の竹中正夫教授に西日本コース開設の協力を要請した。竹中教授はすぐに快諾し、「3週間、寝泊まりの合宿形式でやりたい」と熱望された。当時、同志社大学では大学紛争が激化していたこともあり大学施設利用は断念し、前年に完成したばかりの関西セミナーハウスで開催することとなった。竹中教授の理想であった寝食をともにす

る完全合宿での全人格的教育がここから始まることとなった。

金属労協40周年記念講演に立った竹中先生は当時のことを次のように語っている。「私がイメージしたのはカレッジエイト、英国の学寮です。そこで寝泊まりしながら、まさに24時間寝食をともにして、そこで全人格的な人間形成をするわけです」と。これが、西日本コースで「開校」という言葉を使う所以である。

運営体制・カリキュラムを整え、第1回西日本労働リーダーシップコースが開校したのは、1969年12月2日のこと、受講生はわずか17名だった。

○めざすべき教育

めざすべき教育は第1回から受け継がれている。

第1は、主体的・応答的な人間形成。これは、すぐ解決を与え丸暗記する教育ではなく、多角的に自分自身で考える、一緒に問題解決していく人間をつくることを意味している。

第2は、経営者と対等にユーモアを持ってイエス・ノーを言える組合指導者の養成。テクニックを教えるのではなく、幅広い、そしてインターナショナルな視点を持った、責任ある労働組合の指導者をつくること。

第3は、全人格的な人間形成を行うための4つの柱に基づくカリキュ

ラムによる教育。縦＝自分の立つ歴史的背景を学ぶ、点＝自分の立っている場について学ぶ、横＝自分の住む世界の広がりについて学ぶ、深＝自分の生きる基礎について学ぶ。人間は、表面的なテクノロジーカルなあるいは一つの事象の中にだけ生きているものではなく、深さの中に文化を培いながら生きる命を持った存在である。そういう観点から、お茶室や坐禅などを取り入れている。また、第1回から「特別講演―経営と人間」の講義を実施している。経営者自身の経験を通じ、経営論や人生観、人とのつながりや育成、次世代への提言などを語っていたにいたる。第1回目の講師は松下幸之助松下電器産業(株)社長だった。

第4は、リズムある生活とともにしたオーバーホールという位置づけ。このコースは忙しい現代において、非常に贅沢な研修の機会となっている。忙しさの中、静かに休んで、リズムある生活を取り戻し、産別・単組の枠を越え、寝食をともにした人間的な交わりを大切にし、生きがいやよみがえらせ、使命感を自覚するリフレッシュな時でもある。

40年を機に一本化

東日本コースは30周年を機に、明

治学院大学産業経済研究所との提携から、明治学院大学労働リーダーシップコースプロジェクト委員会(田村剛・大平浩二教授)との提携へと緩やかな協力関係に切り替えた。また、「人格的な教育も含めた基礎教育と、運動推進の専門教育の両輪が不可欠」等の議論も踏まえ、改革への試みが始まった。具体的には1998年から、全コース受講も1週間単位での受講も可能な「経営・情報コース」「国際コース」「経済・労働コース」の専門コースとした。

その後東日本コースは、2001年の第35回から「金属労協の新しい運動の変化を踏まえ、金属産業の政策づくりを推進し、新たな労使関係を構築できる人材を養成する」ことを目的に「上級コース」と改め、政策づくりに必要な専門知識と創造的テクニックの習得をめざした。それに伴い西日本コースは「基礎コース」としての位置づけをより明確にした。

以上のように様々な変革を繰り返してきたが、東日本コースが40周年を迎えた2006年の翌年、もう一度原点に戻って労働者教育を再構築するため、東日本コースは休講することを決定、2008年1月から東西一本化することとなった。

労働リーダーシップコースの 現在地

○現運営体制

西日本コース開設に尽力し、第1回から第37回まで校長を務められた竹中正夫同志社大学名誉教授が2006年8月に急逝された。それに伴い、第38回からは校長に平田哲アジアボランティアセンター元代表、副校長には香川孝三神戸大学名誉教授が就任した。その後運営委員の世代交代の意味もあり、2012年の第44回を最後に平田校長、中條運営委員長が勇退した。

2024年現在、校長は香川孝三神戸大学名誉教授、副校長は石田光男同志社大学名誉教授、運営委員は中田喜文同志社大学教授・上田眞土同志社大学教授・寺井基博同志社大学准教授、そして金属労協組織総務局、関西セミナーハウス活動センターで運営委員会を構成し、運営にあたっている。

○開催日程とカリキュラム

3週間、2週間半と開催日程を若干短縮しながら続いてきたが、より多くの組合が参加しやすくなる観点から、第44回(2013年1月)〜47回(2015年10月)までは開催期間を2週間に短縮した。しかし、教育的

効果等検証の結果、第48回(2016年10月)からは土日を含めた17日間の2週間半と期間を延ばし、現在に至っている。また春闘が始まる時期でありインフルエンザの流行に悩まされてきた1月開催を続けるのは困難であると判断し、開催時期を第45回から10月開催に変更した。

カリキュラムも改革を進めてきた。開校当初は「大学水準の基礎的教育」のため、経済学、社会学、法学、賃金論など基礎講座を中心としていたが、関西セミナーハウスの地の利を生かした、「坐禅」や「お茶室体験」「鞍馬山散策」などを体験型学習も新たに加えていった。その反面、第44回から開催期間を2週間に短縮したことから、深層心理や哲学など人間形成に必要とされる講座、京都市内で学ぶ留学生との国際交流や人間交流を目的とした英会話教室を終了せざるを得なかった。その後、開催期間を2週間半に再び変更したことから、基礎的講座は残しつつ、受講生だけで行う「討論会」の他にも特別討論会「三役と語ろう」や「自主ゼミ」などをプログラムに加え、よりディスカッションする時間を増やす工夫も行った。また、コースの特徴的なプログラムであるゼミナールでは「労働組合と世界」「労働組合と職場」「労働

組合と社会」「労働組合と企業」「労働組合と働き方」の5つのテーマに分かれて全4回、ものづくり産業の労働組合活動や職場の悩み、課題、問題点など徹底的に議論を重ねている。そして最終的にはゼミナールでの討議内容、解決案、方向性についてまとめ、発表を行っている。

○学び舎「関西セミナーハウス」

第1回から会場として使用している関西セミナーハウスは、京都市内にありながら、比叡山の2合目あたりに位置することから、周囲を自然に囲まれ、都会の雑踏からも隔離された、研修所としては理想的な場所にある。敷地内には、能舞台ありお茶室あり、近くには神社仏閣あり。他の研修にはないプログラムを実施できるのも、この学び舎だからこそ。期間中、ハウス内のロビーが解放されるため、夜も受講生同士、自由にディスカッションする姿が見られる。セミナーハウスのスタッフの協力体制もコース運営には欠かせない。運営委員である活動センターだけでなく、フロント、厨房、客室担当など、全面協力体制で臨んでいただいている。期間の長い研修にもかかわらず、昼と夜と同じ食事メニューが出ることはない。50年以上、このコースを続けられているのも、このような陰で支えてく

れている方々のおかげである。

ある日のできごと

—10年間の日記

2014年／第46回(10月6〜18日)

●交流会では肩を組んでの大合唱
コースの折り返し地点で行う交流会。ここまで多少よそよそしかった受講生も、一気に心の距離を縮めるチャンス！恒例の各ゼミ出し物大会では、思いもよらないキャラクターも現れ、大爆笑の渦。あるゼミの出し物では、いつの間にか受講生全員が肩を組んでの大合唱となった。写真①

2015年／第47回(10月5〜17日)

●「ストップ！不安定雇用」をアピール
ディーセント・ワーク世界行動デ

ーに対応して、労働リーダーシップコースでもインダストリアルールのキャンペーン「ストップ不安定雇用！」に関する行動を起こした。朝のラジオ体操・散歩の後、金属労協国際局長から行動の趣旨を説明した後、キャンベーンポスターを手に全員で「ストップ不安定雇用！」とアピールした。この写真は、インダストリアルールのWebサイトにも掲載された。写真②



① 交流会では肩を組んでの大合唱
(2014年・第46回)



② 「ストップ! 不安定雇用」をアピール
(2015年・第47回)



③ 金属労協三役と積極的に語り合った
「特別討論会」(2016年・第48回)



④ ラスト1週間。BBQで英気を養いました
(2017年・第49回)



⑤ 台風の影響で鞍馬山散策を断念し貴船神社に参拝
(2018年・第50回)



⑥ 修了生も参加して開催した50周年記念行事
(2019年5月)

2016年/第48回(10月13~29日)

●特別討論「三役と語ろう」誕生

受講生で行う「討論会」に加え、初めての試みである金属労協三役と討論を行う「特別討論会」三役と語ろう」を実施した。討論テーマは受講生からなる討論会委員会で「女性の管理職・組合役員を増やすには」「執行委員の育成について」など5つのテーマを決定した。緊張した雰囲気の中始まったが、次第に打ち解け、ざっくばらんに積極的な意見交換を行った。写真③

2017年/第49回(10月12~28日)

●先輩からのプレゼント、BBQで英気を養う

残り1週間、ラストスパートのタイミングでBBQを決行。第48回修了生からの寄贈品であるBBQセットを活用し、ゼミの枠を越えて皆で交流。アウトドアが趣味という受講生が大活躍し、お肉にソーセージ、そして焼きおにぎりも堪能。ちよっと油断してお肉が焦げるのもご愛敬。たっぷり英気を養った。写真④

2018年/第50回(10月11~27日)

●台風の影響で鞍馬山散策断念し貴船神社へ

2018年9月に西日本を横断した台風21号は、山々の木々をなぎ倒すほどの強風が吹くなど、京都にも大きな被害をもたらした。第40回から恒例になっていた鞍馬山散策も断念、実行委員会での話し合いの結果、貴船神社に参拝することとなった。計画・調整もすべて自分たちの手で。神社では本宮のご神水に浸すと浮き出てくる「水占みくじ」の文字に一喜一憂。わずかな時間の滞在だったが、京都の歴史と自然を満喫した。写真⑤

写真⑤

50周年記念行事開催(2019年5月25日)

労働リーダーシップコース(旧西日本コース)50周年を記念して、記念式典&シンポジウムとレセプションを、関西セミナーハウスで開催した。記念行事には、来賓の他、労働リーダーシップコース運営委員、労働リーダーシップコース所縁の方々、過去の修了生、金属労協三役など約120名が参加した。また、ロビーとアゴラホールには50周年を振り返る「写真パネル」を展示、修了生が参加した回を懐かしく振り返る姿も見られた。写真⑥

●記念式典

関西セミナーハウス大会議室で開

催した50周年記念式典では、主催者を代表して高倉金属労協議長が挨拶に立ち、50年間にわたり開催してきた労働リーダーシップコースの歴史と果たしてきた役割の大きさと、関係者各位に心からの感謝の意を表した。また、「大きな変化の波に直面している今だからこそ、本リーダーシップコースで新しい時代を切り開くリーダーの養成という使命を果たしていくことが求められている」と述べた。

来賓の厚生労働省森川労使関係担当参事官、関西セミナーハウス活動センター榎本所長代行から祝辞をいただいた。運営委員の挨拶の中では、労働者教育を継続していくことの大切さ、継続の中にも新しい時代に何が必要なのか検証をし、時には変革も必要であること、などが述べられた。

●記念シンポジウム
式典後、「次世代へつなぐ」時代の求める労働組合リーダーと労働リーダーシップコース」と題したパネルディスカッションを行った。
コーディネーターは浅沼弘一事務局長が務め、パネリストには過去の修了生の中から、古賀伸明金属労協顧問(第15回)、中川義明自動車総連副事務局長(第40回)、山中しのぶ電機連合中央執行委員(第42回)、濱田実仁JFEスチール福田山労組執行委員(第50回)の4名を迎えた。シンポジウムではこれまでの歩みを振り返るとともに、これからの労働組合リーダー、これからの労働運動に求められるものは何かなど、幅広い議論が交わされた。

●記念レセプション
懐かしい仲間との再会
レセプションでは運営委員の石田副校長(同志社大学教授)の音頭で50周年を祝い、全員で乾杯した。久しぶりに再会を果たした修了生は、思ひ出話に花を咲かせ、旧交を温め合った。最後に、金属労協副議長・組織委員会委員長のJAM安河内会長が閉会の挨拶を行い、レセプションは終了した。

2019年/第51回(10月17日) 11月2日
●実行委員会からのプレゼント
思い出のムービー披露



⑦ 実行委員会製作思い出のムービーの一場面(2019年・第51回)



⑧ 閉校式後、本当に最後の記念撮影(2021年・第52回)



⑨ 修了生主催によるフォローアップ研修会(2022年・第53回)



⑩ 記念撮影も合言葉で一致団結(2023年・第54回)

ゼミナール発表が終了した後、街中の会場に場所を移し打ち上げを行った。ゼミナール発表も無事終わったことから充実感と達成感に浸りながら思ひ出話に花を咲かせる中、実行委員会からの粋な計らいが、実行委員会ではひそかに作成された、2週間半の写真などをちりばめたムービーが披露された。受講生皆、2週間半の思ひ出と明日は別れる寂しさと相まつのムービー鑑賞となった。写真⑦

2020年/感染拡大により開催無念の断念
例年通り2020年10月に開催する第52回労働リーダーシップコースの準備に取り掛かうとした矢先の4月上旬、新型コロナウイルス感染拡大により政府から緊急事態宣言が発された。これを受け、2020年4月開催の金属労協機関会議で開催断念を決定し、2021年以降も新型コロナウイルス感染拡大状況によって開催を判断することとした。50年以上の歴史の中で、初めての開催断念となった。

2021年/第52回(10月14日) 30日

●2年ぶりの開催、受講生は17名
2021年3月、緊急事態宣言が

過去10年間の開催実績

回	開催年	開催日	受講生数	累計	特別講演講師
46	2014年	10/6-18	41	1584	服部 重彦 (株)島津製作所会長
47	2015年	10/5-17	39	1623	牧野 孝次 (株)村田製作所常任顧問
48	2016年	10/13-29	34	1657	西口 泰夫 (株)ソシオネクスト代表取締役会長兼CEO
49	2017年	10/12-28	35	1692	堀場 厚 (株)堀場製作所代表取締役会長兼社長
50	2018年	10/11-27	43	1735	宮崎 直樹 豊田合成(株)取締役社長
51	2019年	10/17-11/2	34	1769	札幌 操 (株)ダイセル取締役会長
	2020年	※新型コロナウイルス感染症拡大のため中止			
52	2021年	10/14-30	17	1786	前川 重信 日本新薬(株)代表取締役会長
53	2022年	10/13-29	21	1807	仲尾 功一 タカラバイオ(株)代表取締役社長
54	2023年	10/12-28	25	1832	垣内 永次 (株)SCREENホールディングス取締役会長

全面解除になったことを受け、2021年10月開催に向けた準備を開始。感染拡大防止策に留意し募集人員を従来の約半数として開催することと2021年6月開催の金属労働機関会議で決定、再開を果たした。奇しくも第1回の受講生と同じ17名が受講した。写真⑧

2022年／第53回(10月13～29日)
初めてフォロアアップ研修会を修了生主催で開催

2023年6月12～13日、関西セミナーハウスでフォロアアップ研修会を修了生主催で開催した。修了生自ら企画し、運営も行った。フォロアアップ研修会には金子金属労働議長と香川校長も参加、修了生は延べ21名が参加した。研修会では、金子議長の講演「働きがいの向上と金属産業の発展のために」の後、春闘を中心とする組合活動・企業トピックスについて報告し合った。2日目は香川校長の講演「アジアから見る日本の労働組合と労使関係」の後、振り返りの意見交換を行った。写真⑨

2023年／第54回(10月12～28日)

●2代目女性級長誕生

第45回(2013年10月開催)以来、2代目の女性級長(緒方留美子 本田労連中央執行委員)が誕生した。全体ミーティングの自己紹介の際「級長になります」と積極的に宣言し、級長に選出された。期間中、緒方級長の座右の銘が写真撮影の合言

葉となり、受講生の一体感が生まれた。写真⑩

次代に引き継ぐべきもの

ものづくり産業を取り巻く情勢が、目まぐるしく変化をする今、時代に合わせてカリキュラムの改善も必要ではある。しかしその上で、当初の目的と初代校長である竹中先生が西日本20周年記念誌に記されている「人間の教育は単なる区々たる弁舌や机上の空論でできるものではなく、寝食をともにした共同の生活でなされるものである」という理念はぶれることなく、これからも引き継いでいくべきものである。また、労働リーダーシップコースの主役は常に受講生であるべきであり、受講生が運営を担う。これもまた引き継いでいくべきものの一つである。

1967年東日本で始まった労働リーダーシップコースも、東西併せて修了生は2771人となった。2024年10月には第55回労働リーダーシップコースを開催する。「年々歳歳花相似たり、歳歳年人同じからず」この言葉を改めてかみしめながら、第55回に臨みたい。

(2024年9月10日記)